

## 天国の門

千川 純一 (姫路工業大学)

オルセー美術館で「地獄の門」というロダンの彫刻作品を見た(上野の国立西洋美術館にもある)。解説書によると、作者の晩年の作、それまでの独立した別個の作品の集大成で、その構想のヒントになったのはダンテの「神曲」の地獄篇なのだそうだ。有名な「考える人」が、そのまま縮小されて、地獄の門の上真正面に据えられている。「考える人」は“thinker”「思索家」であって、考え過ぎるのは地獄への入り口にあるということなのであろうか。天国は光であり、歓喜であり、無為である、地獄は闇であり、苦痛であり、躊躇である。とすれば、きっと天国の門には楽天的な「夢みる人」がいるのかもしれない。

研究者にも「考える人」と「夢みる人」との二つのタイプがあって、将来計画の審議では対照的な意見が出てくるから面白い。

放射光の分野では、大型の光源を使い、ビームラインや実験ステーションも共同で利用するので、装置の設計から将来計画まで大勢の研究者が一緒になって検討し、立案する。将来計画には目玉が必要だが、目玉は大きいほど実現が難しく、自信が持てないものである。その検討会では、「考える人」から慎重な表現を求められることが多い。実例をあげると差し障りがあるとはいけないので、例えば、今かりに、「X線領域の自由電子レーザーFEL」を将来計画に挙げたとしよう。「考える人」はその実現を心配され、「FELの波長領域の拡大」とか、「FELの短波長化」といった表現を要求されることになる。派手な宣伝をしておく、芭蕉の「面白うてやがて悲しき鶴舟かな」のようになりかねない。この世はすべて減点主義で、悪い面だけが強調されるし、「恥の文化」の伝統を持つこの国ではなおさら、過ちを犯さないよう慎重になるのは当然だ。

しかし、このような無難な表現にすると、その計画の魅力が消えてしまう。競合する多くの計画が提出されている現状では、魅力のない計画が選ばれる可能性はまずない。研究費が出なければ、波長領域のわずかな拡大もできない。実現できるかどうか分からないことを計画に歌わないのが研究者の良心と主張されると、計画の纏め役の人は「あゝ難儀やなァ」と心で泣くことになる。

「夢みる人」は夢に夢中になって、計画の歌い文句が実現できなかった場合のことは考えが及ばない。経営学者の日下公人氏は「不幸を予感する不幸は、前頭葉という生物のメカとしては未完成の頭脳回路をもつ人間に特有のものでないかと思う。その証拠に、前頭葉が未発達の子供はたいてい楽観的で、これは年をとるにしたがって増大してくる不幸のひとつである」と書いておられる。精神的にも、肉体的にも、若くないと「夢みる人」にはなれないのであろうか。

わが国では、新しいフィロソフィーで事を進めるのではなく、前例主義をとり、feed backの傾向が強い。組織の運営、経営も、その範を歴史に求めるところがあり、歴史小説が広く読まれ、戦国の武将の物語などがベストセラーズになっている。

これに対し、欧米ではフィロソフィーが先行するfeed forwardの世界である。未来を予想し、夢が夢を呼んでふくらんでいくわけで、ときには常識では考えられないような極端な思想が打ち出されることもあるが、非常に独創的な研究を生む素地がある。無謀と思われる計画に勇敢にチャレンジするのは、小さな夢の実現で満足できないからである。上の例でいえば、FELの波長領域の少しぐらいの拡大では到底満

足できないのが「夢みる人」で、「X線領域の発振までは死んでも死にきれん」という気持ちで、大きな目標を掲げることになる。

目標を掲げて宣言すると、大困難にぶつかって立ち往生するのが目に見えている。しかし、宣言してあればこそ、最後まで頑張らねばならない羽目になり、仕事が進むのではなかろうか。民主主義の世の中では言挙げしないと何事も実現しないので、最近では「不言実行」より「有言実行」が尊ばれるが、「恥の文化」の伝統を利用して、有言によって実行力を生み出したいと思う。

西堀栄三郎氏の創造性開発の語録には、「創造とはとんでもない大馬鹿者のやることだよ。大うそをつくことだよ。うそもいえんような正直者ではだめなんだよ」とあるそうである。思うことは在る事であり、生ずる事であるとすれば、うそから出たまことが創造なのかもしれない。

一生一代の大うそをつくるのはよいが、日常うそをついてばかりいては信用がなくなるし、「考える人」でなければひとつの分野を地道に構築していく研究者にはなれない。読者の方々は聡明で、大部分の方は「考える人」ではなかろうか。「人生は躊躇なり」ときくと、なるほどと頷くことができ、だからこそ、また、サマセット・モームの「やらずに後悔するより、やって後悔せよ」という積極的な言葉に憧れる。

大きな目標を掲げてそれに向かって真剣な努力をする、あらゆる努力をして、しかも、失敗したときにはサイエンティストとしての生命が失われても仕方がない、その責任はとるという覚悟さえできておれば、大胆に積極的に将来計画をプロポーズしてよいのではなかろうか。

豊かな才能で政治と戦争を演出したナポレオンには逸話が多い。ナポレオンは、鉄砲の玉を跳ね返す強い鎧を作った者に多額の賞金を出すと触れを出したことがある。鎧を作って持参した鍛冶屋たちを前にして、ナポレオンは鉄砲を構え、各自自作の鎧を着て立つように命じた。万一、玉が鎧を突き抜ければ命がない。鍛冶屋たちはコソコソと去り、ただ一人だけ残った。ナポレオンは鎧を着たその男に発砲した。鉄砲玉は見事に跳ね返された。そこでナポレオンはつぎに大砲を引き出させたが、男は自若としていた。もう大砲は打つまでもない、賞金はその男に与えられたのであった。

自分のやった仕事に命がけで責任を持つ、私などはとてもできないことだが、将来計画を考えているとき、いつもこのエピソードを思い出している。仕事は真剣勝負であって、生半可な気持ちでは何事も成就しないのではなかろうか。将来計画を出すからには、この男のように真剣に取り組みたいと思うのである。

将来計画のプロポーズは大胆にと書いてきたが、研究の実施に当たっては、むしろ、「考える人」に慎重で、細心に吟味しつつ、間違いを事前に予知して、着実に仕事を進める能力が備わっているように思われる。「大苦と大楽を味わうのが研究であり、また、より大苦、より大楽を味わえる研究を目指すべきである。研究者は大悲観者であり、大楽観者でなければならぬ」というある先生の話を紹介したことがあるが、あるときは「考える人」となり、あるときは「夢みる人」でなければ、独創的な仕事は完成しないのではなかろうか。「夢みる人」は年を重ねると、不幸を予感する能力が出てくるらしいが、優秀な「考える人」の方々には少し前頭葉頭脳回路の働きを鈍らせていただいた方がよいと思う。

天国の門には、きっと細心剛胆の人がいるのにちがいない。

本誌に軽い科学随筆欄を設けることにしました。名づけて「同步放射」。「放射光」としたいところですが、日本経済新聞がすでに科学随筆欄の名に使っていますので、本誌は中国語の放射光を意味する「同步輻射」からとりました。わざと「輻」を「福」に換えましたのは「同じ道を歩む会員に福が射すように」との願いが込められています。

(編集委員会)